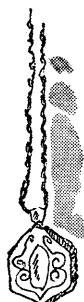


誰がこの子どもたちを悪くしたのだろうか、

教育の中における障害児差別について

福 井 達 雨



☆ まな板の音

「このところ、子どもたちの精神が不安定で、失尿便、精神発作、てんかん発作が増え、夜もなかなか寝つかず困っています。

急に子どもたちが不安定になってきたのは、なぜでしょうか?」

主任保母の松井さんが、心配そうな顔をして相談にきた。

「そんなことわからへんがな。一度、データーをとつて、全職員で原因追求をする必要があるのとちがうんか」

「そうですね」

こうして、全職員が、それぞれ自分の分野でその原因を探すことになった。

一ヵ月、二ヵ月たつた。どうしても原因がつかめない。三ヵ

月、四ヵ月、職員たちもいらだつて、この間、何度も激しい話し合

いの火花が散ったであろうか。しかし、原因がつかめなかつた。

そんなある日、炊事係の東郷さんが、オズオズと、こんなことを言い出した。

「学問的でなくて恥ずかしいのですが、子どもたちの精神不安定になってきた時期と、台所が機械化された時期が同じだと思えてならないのです。機械が、この子どもたちの目に見えない心をおかしているのではないかでしょうか?」

止揚学園の創設期は、非常に貧しく、台所もほとんど機械設備がなく、職員が、自分の手で野菜を切つたり、マキでご飯をたいていた。私も、一時間もかかつて大根おろしをつくらされた樂しい思い出がある。

しかし、これではあまりにも時間がかかりすぎ、職員たちが大

変だというので、無理をして、台所を合理化、機械設備を整えた。台所は便利になった。野菜を切るのも、大根おろしをつくるのも、わざかな時間でできるようになった。

しかし、東郷さんは、台所に機械設備が整い、職員が楽になり、汗を流さなくなつてくると、反対に、子どもたちの心が、死んでいくように思えてならないと、言い出したのである。

初めのうち、私たちは、あまりこの意見に耳をかそうとしなかつた。

東郷さんは、言い出すと、なかなかあとにひかない、男まさりの性格である。

「また彼女の強情が始まつた」と、ニヤニヤ笑う私たちに、東郷さんは、熱心に同じことを言い続ける。

「そんなら、実験的に、一、二週間、職員が手で食物を切つてみよう」

私は、東郷さんのむこう意気の強さに負けて、職員たちに指示を与えた。

台所は、昔にかえり、モーターの音が消え、コトコトと、まな板で食物を切る音が聞こえ始めた。一週間、二週間たつた。不思議なことに、子どもたちが落ち着きをとりもどし、もとのように安定していく。

「子どもたちが静かになりましたね。東郷さんの言つたことは、正しかつたですね。先生、私たちが楽になればなるほど、子どもが駄目になりますね。教育つて、汗のにおいが必要ですね」

シミジミと職員たちが語つた。

☆ 汗の流れる世界

知能が分化している私たちは、生命を知恵を働かせて守ることが多いが、知能の未分化なものは、知恵を働かせる力が弱いので、感覚で生命を守ることが多い。

たとえば、私たちは、毒の入つた水でも一見しただけでは、それがわからないし、地震のような未然の危機が迫つっていても、それがおこるまでは感知できない。

しかし、知能の未分化なものは、それを未然に察する感覚をもつていて、避けることが多い。

知能が未分化なものは、この中で、感覚の発達が大きいのである。

重い知恵おくれの子どもたちも、知能は未分化であるが、このような感覚的な子どもたちである。そこで、生命のない機械をとおした食事を敏感に感じ、重い知恵おくれの子どもたち特有の後退現象の強さから、心が殺され、精神不安定という施設病が、はつきり表われたのである。

文明国家は、機械や物質によって、人間が殺されることが多い。

日本は、人間を信じなくとも、機械を信じれば生活も教育もで

きる世界に変わりつつある。

先日、私の運転免許証が、コンピューターのミスで、事故をおこしたと表出され、私は、「事故をおこしたことはない」と言いつたが、警察では、なかなか信じてくれなかつた。このように人間より機械が信じられる世界は、恐ろしい世界である。

教育の世界が、この物質文明に毒された時、子どもの目に見えない心が、生命が殺されていく。

教育とは、先生が、汗を流し、身体を動かせば動かすほど、子どもがよくなり、先生が動かなくなればなるほど、子どもが悪くなる世界だと、私は思えてならない。

☆ 大きな手と小さな手

今日も、止揚学園の裏山にあるお寺の石段で、足の弱い子ども

の機能訓練をやっていた。

重い知恵おくれの子どもたちは、とても足が弱く、足の訓練

は、この子どもたちの教育の中で、重要なものである。

この訓練は、激しく、厳しく、時には、子どもの足から血のにじむようなこともある。

二百段もある石段を、上ったり下りたり、子どもたちは、自分でできないので、職員が子どもたちの手をひっぱって訓練をする。

子どもたちも大変であるが、職員はもっと大変である。五十額から汗がしたり、心臓が早鐘のようになる。こうなると、職員は、無我夢中。私も何人目かの子どもを石段から下ってきて、フト、上をふりむくと、一人の子どもが、ワーウー泣いて、保母の足もとにうずくまっていた。

「コラー。どうしたんや。早く下りてこい」

私は、保母をどなりつけた。

こんなに疲れている時は、やさしい言葉より大声の方が、励ましになることが多い。

「スマセソ。どうしても子どもが動かんのです」

「そんなことがあるか。ダラダラするな」

保母が、泣きそうな顔をして、子どもを抱きあげようとするが、子どもは、泣いて、石のようにすわっている。

「先生、助けて下さい。駄目です」

「何を言つてるんや。なきないぞ。子どもと妥協したらあかんなど」

こう言しながら、私は、すわりこんでいる子どもの所に走つ

た。子どもに手をさしのべると、子どもは、スッと立った。そのまま私は、ドンドンと石段を下りた。

子どもは、あっけにとられたように、私についてドンドン下りてしまった。

しばらくすると、子どもに泣かれて困っていた保母も下りてきた。

「先生、あんなにこわがって泣いていた子が、どうしてスッと

下りてしまつたんですか。先生には、神秘な力があるのですか」と、不思議そうにたずねた。

「アホ。そんなもんあるか。ぼくやつて普通の人間や。キミなあ、子どもの手をとつた時、心に何を思つていたんや」

「上の時は、何とも思わなかつたんですが、下りる時、あまり

急な石段なので、こわくなり、この子には無理で、できない、怪

我をさしてはいけないと、強く緊張しました」

「そうやう。それがあかんのや。この子どもたちは、感覚的な子どもやから、キミの大きな手ど、子どもの小さな手のむすび

あいの中での、キミの心が、子どもにつたわつたんや。とたん子どもは、コワイ、できへん、と思って、すわりこんでしまつたんや。

「ほくはなあ、こんな時、この子は何でもできると、おそれしき

をもたないで、自信をもつて下りてくるんや。そしたら、子どもも平気でついてきよるんや。

重い知恵おくれの子どもたちでも、何でもできるんや。それをできなくしてしまうんは、私たち大人なんや」

保母は、何も言わなかつたが、心の中に何か激しく燃えているものが感じられた。

☆ ロープでくくら

重い知恵おくれの子どもの教育に入る職員は、初めのうち、（この子どもたちは、何もできないんだ。だから手伝つてやらなければいけない）このような考え方から、子どもの先まわりをして、何でも手伝つてしまふ。

このような時、私は、職員に、「キミの手をロープでくくらて、

子どもにぶつかれ」とよく言う。

手をロープでくくらて、子どもの教育にあつた職員は、

「この子どもたちは、自分で何でもできるんですね。おどろきました」

初めて何かを見つけたような顔をする。

「あたりまえやないか。この子どもたちも人間や。キミが、何もできないと心の中で思うから、この子どもたちが動きよらへんのや。できる子を、キミができなくしてしまつてるんやで」

と、どなる私のこわい顔。

重い知恵おくれの子どもの教育に、二十三年半とりくんできて、その中でシミジミと思うのは、この子どもたちを悪くしたり、できなくさせているのは、教師側、大人側ではないだろうかということである。

いらない同情の中で、重い知恵おくれの子どもたちの人格をおかし、本来子どもたちのもつているものまでつぶしている教育。もう一度私たちは、強く反省しなければならない。

止揚学園の、ノビノビと明るく生きている子どもを見ていると、これをつぶさない教育をすめなればと思う。
この子どもたちを、誰ができなく、悪くしたのであろうか。

(止揚学園)



訂 正

十月号「切り離されない社会で切り離されない教育を」の文中、次のように訂正させていただきます。

P30 下段 17行目

「障害児であろうと」→「障害児にであろうと」

P32 下段 13行目

「子どもは人間の子どもである」→「子どもは人間の大人である」

本誌定価改訂のおしらせ

昨今の諸材料費値上がりのため、誠に不本意ではございますが、本誌の定価を左記の通り改訂させていただきます。なにとぞ事情ご賢察の上、ご諒承下さいますようお願い申し上げます。なおページその他は従来通りでござります。

一 「幼児の教育」一部定価 100円 (昭和五十年一月号より)

記

昭和四十九年十一月

株式会社フレーベル館

以上